

大学体育と主体形成

野 崎 武 司*

I. 緒 言

体育科教育の目標は、体育・スポーツを通じての人間形成（教育）から、体育・スポーツの教育、つまり運動文化そのもの、スポーツの楽しさそのものを伝えていく方向にシフトしてきたように思う。現行学習指導要領に貫徹する「楽しい体育論」も後者の立場であろう。その意味では、体育・スポーツを通じて主体の形成を目指す「主体形成論」は、古い立場であるかもしれない。しかし主体形成論は、かなり幅広い理論的射程の中で大きな展望を持っていると考える。例えば、生涯スポーツを目指すにしても、運動文化の内在的価値や、機能的特性に触れるだけでは不十分と考える。よりよい社会関係を自ら作り上げようとする主体性がなければ、スポーツを続ける場は保持できない。多分にスポーツは多くの他者の意図と関わりながら遂行される社会的行為である。また主体形成は後述するネットワーキングに不可欠の要素でもある。それは近代性をも超克しようとする新しい形の社会運動である。

しかし内海の提示するスポーツを通じての主体形成論は、近代的主体の諸問題がそのまま未解決に内包されているように考える。それゆえ本研究の目的は、内海¹⁾の主体的形成論を批判的に検討することで、大学体育にいかなる可能性があるかを検討することにある。

II. 体育科教育と主体形成

内海はスポーツの直面している現代的課題を、人民的スポーツの権利と公共性の指標の実現、ないしその障害の克服として提示し、主体形成を、権利・公共性の指標の実現を具現化する人間・集団の育成として記述している (p.213)²⁾。それは、スポーツ的世界の三層構造に対応して展開されるという。まずはスポーツ的世界の三層構造を概略しよう。

スポーツの構造性の第一の層は、「スポーツそれ自体」として提示される。それはスポーツ的世界の中核である。遊戯性、組織性、競争性、身体性などのグートマン的説明や、身体運動の体系、身体文化などのヴォールの説明、さらにディーム、マッキントッシュ、ジレなどの説明がなされる。構成的ルールが創り出すスポーツ固有の意味空間と考えていいだろう。第二の層は「スポーツの組織」である。クラブ、連盟など「スポーツそれ自体」を直接に支えている組織とその活動に焦点が当てられる。第三の層は「スポーツの社会的意義」である。当該時代の当該世界に、スポーツが如何に位置づけられているかに焦点が当てられる。

以上、三つの層が同心円を拡大していくように広がるのがスポーツ的世界であるという (p.175-202)³⁾。そして内海は「我々がスポーツに関わるということは、この三階層のすべてに関わらざるを得ない (p.183)⁴⁾」という。チームワーク、クラブワーク、ソーシャルワークと関わりを広げ

*助教授 教育学部 (生理学及び衛生学)

ていくことで、よりよいスポーツ的世界の形成につながるという。筆者なりに要約すれば、共にスポーツする仲間がより充実したスポーツ体験を味わえるように仲間に配慮するチームワーク、また目上のものに教えてもらうために参加するのではなく、自分たちそれぞれの力で円滑な運営や充実した事業経営を目指すクラブワーク、スポーツの健全な発展のためにも、クラブの存立のためにも、広く社会に働きかけるソーシャルワーク、こうした総合的課題に積極的に取り組もうとする〈主体〉こそが必要とされているのであり、体育科教育は、こうした総合的能力の形成（主体形成）に努めなければならない、ということになるだろう（p.221-229）¹¹⁾。こうした内海の考え方は、彼固有の学力論とも結びつくことになる¹²⁾。

Ⅲ. 主体形成論の批判的検討

内海の立論には一貫性があり、また歴史研究から将来展望まで充実した内容である。筆者は、主体形成論に大きな可能性を見ているが、それがあまりに近代的主体という色彩が濃い点に難点を感じている。その点に限り、批判的検討を試みる。まずは、近代性とは何か、近代的主体とは何かを考えてみる。その上で、内海のスポーツ的世界の三層構造に従って、近代的主体の諸問題を考える。

1. 近代的主体の諸問題

近代性とは如何なるものであるのか、その全貌を捉えることは容易ではない。まずは山崎の平明な記述を参照しよう。「近代的な人間は富を生産によって拡大し、個人を業績によって評価し、地理的にも身分的にも流動をよしとし、国家であれ職場であれ、人間関係を契約にもとづいて組織することをめざします。これに対立するのは、ものや土地の世襲的な所有であり、反復される伝統的な生活様式であり、血縁と地縁にもとづく宿命的な共同体ですが、過去三百年、世界中でここから近代性への着実な移行がみられました¹³⁾」。この記述に見られるように、近代性の中核的な本質の一つは、封建的束縛からの解放、自由、自律した主体性という近代的な人間観（近代的主体）であろう。近代的主体は、自ら自分の生き方を決め、努力すれば何にでもなりうる可能性を保持する。この意味において近代性は明るい光に包まれている。

近年の近代性をめぐる諸学は、この近代的主体こそが、近代の不幸の源泉であることを描いている。確かに我々は、学校や会社という分節化された時空¹⁴⁾において、自らが点を稼ぐためだけの機械であるように感じることもある。また専業主婦が世の中から切り離されて、家庭という時空に封じ込められるように感じることも理解できる。近代は自由を獲得したのではなかったのか。近代性の中に生きる我々は、なぜこうした疎外感を感じるのか。この問題に関して、見田は次のように描いている。近代的自我は「主観の形式性としての自己神格化と実践の現実性としての自己物格化¹⁵⁾」の間で引き裂かれていると。近代的主体は自由で自律的であり、自分自身の生き方及び、あらゆる物事、出来事の意味づけ、価値づけを自ら自身が行っていると考えている（自己神格化）。しかし、この近代的主体は、労働による貨幣の獲得を通じて、生活の自律を確保している。貨幣獲得のための労働においては、自らの生産物を売りさばくという意識が前面に現れる。他者に必要とされるもの、他者の役に立つ物事や価値を生産する、提供するという共同の意識は、売りさばくということの手段として従属化される。非人格的な商品の需給関係の中でのみ、他者

に役立つための労働が遂行される。近代的主体は、自らの自由で自律した生活を維持するために、非人格的な貨幣と商品の生み出すシステムに適合し、これを充填する一部品（歯車）として自らを物格化せざるをえない（近代的自我の逆説）。

近代的主体とは実に不思議なものである。確かに他者たちと互いに助け合いながら生活しているにも関わらず、助け合っているという自覚は極端に薄められ、自律しているという意識ばかりが前面に現れている。そしてその表面上の自律感や自由の意識の裏側には、どうしようもない疎外感が連なっている。見田の分析は、この問題を明晰に解いているように思う。見田によれば、近代的社会とは「諸個人の意識それ自体の内部にある共同性への志向に基づいて存立する社会（共同態）とは対照的に、私的な幸福を追求する主体としての諸個人が、そのせめぎ合い自体の結果として、一定の『社会的』な法則性を、自ら自身の意識から独立した客観性として貫徹せしめ、この法則性を媒介として諸個人の共同性が結果的に実現するという…社会の形態⁶⁾」となる。

近代における疎外は、国家や権力から一方的に抑圧されるような単純な図式では説明しえない。疎外とは、幻想的自己意識の中では自由で自律的であるはずの人間が、現実には、誰も制御しえない制度というものに、がんじがらめにされている、ということである。個を封じ込める制度自体、逆説的に理性的な近代的主体が創り出しているのである。理性とは、当該個人の立つ地平を中心に、世界を一方的に秩序づける営みである。理性的に自律をめざす近代的主体は、その秩序化のせめぎあいの中で、逆説的に巨大な制度を創り出し、それに依存し、その中で物格化されていく。

近代の疎外を、国家権力のような概念で説明し、それへの対立を目指す形で、主体形成を論じる内海の枠組みでは、様々に論じ得ない問題があるように考える。近代的主体の逆説性を考慮することで、そうした問題に解決を与えてみたい。

2. <スポーツそれ自体>と近代的主体の問題

「スポーツとは、その文化の本質として競争性を内包するも (p.207)」⁷⁾と内海はいう。まずは内海の競争性に関する議論⁷⁾を略述しよう。

内海は、スポーツをめぐる競争性に、「スポーツそれ自体がもつ競争」「スポーツ参加における競争」「スポーツの結果（記録）がもつ競争」の3つがあるという。さらに「スポーツそれ自体がもつ競争」には、人間性及び人間文化を発展させる健全な競争（ソレブノヴァニエ）と、その疎外された特殊な一形態としての競争（コンクレンツィア）があるという。資本主義的協業はソレブノヴァニエをコンクレンツィアに転化させ、労働者を相互に反目させて、彼らの人格を偏狭かつ利己的にさせるという。そして「スポーツの社会的意義における政治利用、商業主義的利用、そして勝利至上主義が、選手を、監督を、応援団を、そして地域、社会を煽り、選手のフェアプレイ精神を歪め、スポーツそれ自体の競争をも歪め、退廃化させている (p.209)」⁷⁾という。ソレブノヴァニエをコンクレンツィア化させるものは、「スポーツ参加における競争」と「スポーツ結果（記録）がもつ競争」が主であるという。

内海の以上の議論は、ある意味で納得のいく点がある。しかし、スポーツを政治利用・商業主義的利用に資しているものは、国家権力のような明確な対象ではなく、近代的主体たちのせめぎあいの運動なのではないか。また内海における、健全な競争（ソレブノヴァニエ）と疎外された

競争（コンクレンツィア）の弁別は今一つ曖昧である。さらにソレブノヴァニエをコンクレンツィア化する根源が資本主義的協業であるとする点も、納得できない。例えば、内海は、体育の授業で、バレーやバスケットなどの集団種目では不出来な子はお荷物となり、パスさえろくに回して貰えない、という疎外された競争の場面を描いている（p.214）¹¹。こうしたスポーツ場面での疎外された競争の原因は資本主義的協業にあると言い切れるのだろうか。内海は、スポーツ場面での疎外された競争は具体的に提示しているが、健全な競争を明示しているわけではない。さらに健全な競争を実現する方途を具体的に提示しているわけでもない。

確かにスポーツそれ自体が内包する競争性ゆえに、実際のスポーツ場面において、内海のいう疎外された競争が実現する場合もあるだろう。しかし、その原因は、資本主義的協業というより、むしろ近代的主体そのものにあると考える。近代的主体はエゴイスティックに自律した絶対者でもあるからだ。競技スポーツはその活動のなかで否応なく、上手な者と下手な者を差異化し、序列づけていく。スポーツの上手な者はその立脚する地平を中心に世界を描き、秩序化を図ろうとするだろう。それは下手な者には疎外として現れるかもしれない。ゆえに、より健全な競争を実現するためには、むしろ、近代的主体自体のエゴイズムの超克が必要なのではないだろうか。

見田において、エゴイズムは、自己以外の一切を物格化する精神である¹²。近代的主体にとって他者が響存的主体としてでなく、物格化された対象として存立するとき、自己はエゴイズムの絶対性として定立されるという。この絶対精神は、一切の意味と価値とを自慰的に自己の内のみつくしつつ、無意味さの宇宙をただよう孤独の絶対者ともなるという。自己以外の一切は、意味づける権能を持ち得なくなるため、当の自己自身は何ものによっても意味づけられないのである。また、作田¹³は、ルソーの思想体系を整理する中で、エゴイズムを、自分の虚栄心を満たすためにだけ他者と関係を結ぶこと、として描いている。この社会関係に身を置くと、彼は自分の利害ばかりに敏感で、自己防衛の網を張り巡らしている。その意味で、虚栄心に基づく他者との関係は、端的に自己閉塞なのである。作田はこうした状態を、人間の不幸と呼んでいる。

近代的主体の逆説性に注目するなら、次のような奇妙な疎外関係を抽出することができる。エゴイスティックな主体どうしの社会関係を考えるなら、誰かが一方的に他者を疎外するという関係は成立しない。互いに自分だけが意味づけをする近代的主体であるため、互いが互いを物格化するという関係性が生まれてくる。これは、内海の枠組みでは説明し得ないものである。虚栄心とは不思議なもので、自分を羨望してくれる他者がいなければ、虚栄心を満たすことはできない。その関係の中で自らの虚栄心を満たそうとするなら、図らずもそれは他者への隷従にゆきついてしまう。「俺は凄いだ！」という虚栄心は、同等にエゴイスティックな他者の前では「どうか私の凄さを認めてください」という屈服に転嫁する以外にない（自尊心のパラドックス）¹⁴。これも自己の尊厳と疎外が逆説的に表裏一体となる関係の病理である。

大学生や社会人の段階にあっては、スポーツの上手な者が下手な者を疎外するという事態より、自尊心のパラドックス的な疎外関係の方が生じやすいのではないだろうか。虚栄心を満たそうとする意図が充満したスポーツの場面は、明らかに歪んだ競争（コンクレンツィア）を招き、そこに関わるものの誰もが充実した体験を得ることはできないだろう。その根本的原因は、近代的主体のエゴイズムにある。自分だけの自己実現、自分だけの虚栄心を満たそうとすれば、〈スポーツそれ自体〉はもう一つの疎外の場となる。

健全な競争（ソレブノヴァニエ）は如何に可能であるか。解決のためには、諸個人がエゴイズムを超越する以外にない。それは、見田の言葉を借りるなら、他者も同等に自らと同格の意味づけをする主体であることを深く自覚し、互いの目的・意思・欲求に直接に対応しあうような交響的主体（p.63）⁹⁰として自己を定立させることである。その上で、真に互いの向上を目指して〈スポーツそれ自体〉に取り組むとき、ソレブノヴァニエを実現することができるのではないだろうか。

3. 〈スポーツの組織・スポーツの社会的意義〉と近代的主体の諸問題

内海の描く、スポーツそれ自体の競争を歪め、退廃化させている社会状況は、もちろん望ましいものではない。その根源が近代的主体自身にあるにしても、より望ましいスポーツの場、スポーツ組織、及び社会状況を求めていく主体の形成は必要である。しかしそれは内海のいう、会則に基づいた民主的クラブ運営や、国家権力との権利闘争などで解決できるものではない。なぜなら、自らが創り出した既成のルール（会則や権利の体系などを含めての成文化されたルール）が、自らの現状にそぐわないにも関わらず拘束的に働くとき、制度からの疎外を感じるからである。

ここで参考にしたいのは、「ネットワーキング」という呼称で近年話題になっている、新しいタイプの社会運動である。まずはネットワーキングの定義を概観しよう。「都市自体の社会的矛盾を自発的に解決しその過程で生活文化を創造していくような一貫性のある社会運動⁹¹」。「指導する者とされる者という伝統的左翼が持つ政治意識からは離れた、個の自立性と、個性や違いを尊重する底辺民主主義に基づく自主参加組織⁹²」。また金子の考え方⁹³を要約すれば、他者の異質性を尊重する人たちが、通常「自分の問題ではない」と考えやすい問題を「自分と無関係な問題ではない」と捉え直し、協力の輪を連鎖的に広げる中で、問題の解決を推進する社会運動、となるのではないだろうか。具体的には、市民レベルのゴミ処理運動、有機農業運動、「児童館をつくる会」、障害者支援運動、生協のワーカーズ・コレクティブ、町おこし・村おこし運動、などなど様々でありながら、そこに共通するのは、社会の諸問題を自分たちの問題として共感的に捉え、その問題解決に主体的に取り組んでいるということである。その意味で使命共同体⁹⁴と呼んでもいいだろう。

地域社会におけるスポーツクラブが、ネットワーキングの運動体となっている例も近年注目される場所である。例えば、神戸市垂水区の団地スポーツ協会は、地域住民がスポーツを行う場と機会とを自ら確保するために結成されたものであるが、単に趣味のクラブ活動を続けるばかりでなく、地域の祭りやバザーの開催、へき地との交流（ふるさと提携）、神戸在住外国人との交流促進、有機野菜などの直販、フィリピンとの国際スポーツ交流と海外支援など、多彩な事業を展開している。よりよいスポーツの場を確保しようとする主体的な運動が、長い時間をかけて、次第により大きな事業を生み出してきたのである⁹⁵。

ネットワーキングは、近代的主体を疎外する、制度それ自体の変革に真っ向から迫る活動である。しかしそればかりではなく、そこに参画する人々の自己実現ともなっている。例えば奥田は⁹⁶、ネットワーキングに携わるリーダーたちの声を基に、ネットワーキングが自己の潜在する可能性を拓くことと直結していることを描いている。「地域が豊かになることが個人が豊かになることにつながる」などという歓喜の声は実に力強い。

このネットワーキングという活動が始動する場所では、エゴイスティックな孤独な絶対者としての近代的主体は、超克されていなければならない。奥田は、ネットワーキングに携わる人々の特徴を次のように整理している⁹⁰。彼らは、自らの関心・興味、生き方の達成動機が強い。したがって住民運動やまちづくりへの参加も否定的ではないが、自らの関心・興味、生き方との相互の響き合い、波長の合うことが大切である。まず彼らの生き方とライフコースに応じて共感できるかどうか問われる。その意味で個人と個人の結びつきは、同じ関心・興味、生き方の共通性が前提となる。以上から、ネットワーキングが、他者との〈共感〉から始動することがわかる。自立した独善的な絶対者としての自己を幻想的に保持する限り、ネットワーキングは生まれない。

さて、独善的な近代的主体とは、あらゆる物事を意味づけ、価値づけする主体であった。それゆえに近代的主体は、自己自身の存在の根拠も自己自身によってしか意味づけられないような存在であった。なぜ今自分がここにおいて、これから何処に行くべきであるか、こうした人間存在の本質的な問いに対しても、自分自身以外の何ものにも頼ることはできず、それゆえ近代的主体はある種の無意味（ニヒリズム）を抱え込む。作田は、近代人の生き方として、自己自身の聖化（見田のいう自己神格化）とは別に、対象の聖化⁹¹という側面を提示している。対象の聖化とは、特定個人であれ仕事であれ国家であれ、なんらかの対象を神聖化し、そこに絶対的価値を見だし、その枠組みに自己をあてはめていくことで意味の充実をはかるというものである。「私たちは外部から課せられた方向性を個人主体の名において拒否する（自己の聖化）が、同時に私たちは自らを超えたシステムである超越的な対象の一部でありたいと切望している（対象の聖化）」と作田はいう。近代人は、この自己自身の聖化と対象の聖化とを結ぶ軸を絶えず行き惑っているという。

ネットワーキングという関係性の中にみられる人間のあり方は、作田のいう近代人の病（自己自身の聖化と対象の聖化とによる引き裂かれ）とは、本質的に異なるものである。共感から出発する社会関係は、互いの相違を尊重する自己（相互人間化とでも言おうか）が、積極的な助け合いの活動の中で、自己自身の意味と世界の意味とを創り出していくような働きを担っている。意味や価値の源は、自己にあるのでも、対象にあるのでもなく、他者とのコミュニケーションのみ存在しているのであり、自己のありようも、世界の意味（イデオログ）もコミュニケーションからもたらされるのである。見田のいう交響的主体の内実は、まさにこの事態に他ならない。ここには奇妙な（自己言及的）循環関係がある。個々人の主体性（私というもの）自体がコミュニケーションの中から錬成されていながら、その個々人の主体性がコミュニケーションを再生産したり、時に変容を与えたりしている。個と社会秩序はコミュニケーションを核にして相互規定的に一体化しているのである（マイクロマクロループ⁹²）。ここに近代的主体を超克した新しい自己像のビジョンを描くことができる。それは、他者たちと共に生きる自己が、その共同的相互作用の継時的展開（コミュニケーション）の中で、自らの存在の意味と世界の意味を確かめ続けていくような、自己の存在様態である。個々人は決して自由で自律的なものではないという深い自覚、関係の中で生かされ、また生きているという人間存在そのものへの深い目覚めが必要であろう。これは生きられた生活世界の中でのニヒリズムの克服ともいえよう。

内海の主体形成論で期待されるクラブワーク、ソーシャルワークとは、より民主的な会則の構築とその運営であり、権利闘争という代替する新たな社会体制の希求であった。それは、自らの立

脚する地平へと中心化させた代替の制度を絶対視し、その実現を目指すという意味で、ある種エゴイスティックな活動ではなかろうか。それこそが疎外の源となるのではないか。ネットワーキングは、自己自身の意味と世界の意味を絶えず他者とのコミュニケーションの中へ開放するという困難な営みではある。しかしそれが不可能であるかぎり、制度の流動化は実現し得ないのではないか。

IV. 今後の展望

より充実したスポーツ体験を味わうための、スポーツそれ自体の場を自ら追求すること、そのためのより好ましいスポーツ組織や社会状況を自ら追い求めること、これは内海の描くように、必要なことであると考えられる。そうした活動の担い手となるための主体形成でも必須であろう。

生涯スポーツの実現といった目的を仮に掲げるとしても、大学体育で学ばせるべきことは、単にスポーツの技術であってはならないであろう。また楽しさ、運動文化の内在的価値、機能的特性といった内容でも不十分であろう。むしろ、自分たちの手でスポーツの場を創り出していくような主体の力なのではないか。それも、他者とのコミュニケーションにあらゆる意味をあずけるような交響的主体としての力、他者との共感を核に何かを新しく生み出していくような力なのではないか。

授業で集った仲間を自主的なサークルへ導くような、カリキュラム構成も考えられるであろう。しかしその教材化は今後の課題としたい。

文 献

- (1)内海和雄 (1989) 『スポーツの公共性と主体形成』 不昧堂
- (2)内海和雄 (1984) 『体育科の学力と目標』 青木書店
- (3)山崎正和 (1994) 『近代の擁護』 PHP研究所 p.184-185
- (4)森岡清志 (1993) 「都市的ライフスタイルの展開とコミュニティ」
蓮見・奥田編著『21世紀日本のネオ・コミュニティ』
東京大学出版会 p.16-20
- (5)見田宗介 (1979) 『現代社会の社会意識』 弘文堂 p.67
- (6)前掲 見田 (1979) p.62
- (7)前掲 内海 (1989) p.203-209
- (8)前掲 見田 (1979) p.64
- (9)作田啓一 (1992) 『増補 ルソー』 筑摩書房 p.4
- (10)長谷正人 (1991) 『悪循環の現象学』 ハーベスト社 p.25-26 及び
架場久和 (1981) 「近代的自己とアンビヴァレントな状況」
『現代社会学16』 講談社 Vol.8-2 p.25-39
- (11)越智 昇 (1986) 「都市における自発的市民活動」
『社会学評論』 Vol.147 p.272
- (12)古沢広祐 (1988) 『共生社会の論理』 学陽書房 p.186
- (13)金子郁容 (1986) 『ネットワーキングへの招待』 中公新書 及び

- 金子郁容 (1992) 『ボランティア』 岩波新書
- (14)内橋克人 (1995) 『共生の大地』 岩波新書 p. 4
- (15)蓮沼良造 (1992) 『実践コミュニティ・スポーツ』 大修館書店
- (16)奥田道大 (1993) 『都市と地域の文脈を求めて』 有信堂 p.137
- (17)前掲 奥田 (1993) p.171
- (18)作田啓一 (1976) 「近代化とニヒリズム」 『岩波講座文学11現代世界の文学1』
岩波書店 p.264-267
- (19)今井・金子 (1984) 『ネットワーク組織論』 岩波書店 p.251-266